

天文博士弓削是雄占夢語第十五 <てんもんはかせ ゆげのこれを ゆめを うらなふこと>

◎天文博士：律令制の陰陽寮に属し、天文を読み取ること、それを教えることを職務とする教官。

◎現代の天文学者が解説：陰陽師は、飛鳥時代から法律で定められた公務員、陰陽寮という機関で働いていた。暦を作る。時刻を決める。天体観測に基づき吉凶を占う。天体観測（現代も同じ）に優れたものが天文博士の地位を与えられた。

当時の天文博士と、現代の天文学者の違いは、占いが大事な仕事であった。そのことは明治時代まで続いた。

◎藤原定家が、「明月記」の中で、陰陽師から聞いたことだが、「平安時代、おうし座に 突然明るい 客星が表れた」この記録のおかげで、1000 年前に起きた、超新星爆発のあとだとわかった。

◎当時の天皇が、「頭が痛い」とぼやいていた。それを聞きつけた安倍晴明が、「天皇の前世の人物の骸骨が 岩の間に挟まっている」といい、天皇はそれを探させ、岩から取り除くと、頭痛が治った。  
「そらあ うそだ」と言いたくなるが、人の悩みを上手に除いてあげる才能だったのでは。

◎陰陽道：安倍家、加茂家有名。

◎弓削是雄：ゆげのこれを：当時、夜間に日蝕が発生した、当時もすでにこういうことがわかっていらしい。  
安倍晴明が活躍する前の人だったらしい。

◎今は昔、伴世継：とものよつぎ：というものがおった。穀蔵院（穀倉院）の使者として、その封戸を徴収するため東国に出かけ、何日かして京に帰ってくる途中、近江の国瀬田の駅：うまや：に宿を取った。

ちょうどその折、その国の国司が国丁に来ていて、陰陽師の弓削是雄というものを京から招き、大属星：だいぞくしょう（生年によって、その人の運命を支配する星）を祭らせようとしていたが、その是雄がこの世継と同宿した。

◎而ルニ、忽（たちまち）ニ悪相を見て、覚めてのち、是雄二伝ク、「我レ、今宵悪相を見ツ。我レ、幸ニ君ト同宿セリ。コノ夢ノ吉凶ヲ占ヒ可給シ（たまうべし）」  
是雄占テ伝ク、「汝チ明日家ニ返ル事無カレ。汝ヲ害セント為ル者汝ガ家ニ有リ」ト。

◎弓削是雄が、世継に、「明日は家に帰ってはいけない あなたを殺そうとするものが潜んでいる」  
世継、「永らく東国に行っていた たくさんの官物、私物がある 帰らないわけにはいかない」  
弓削是雄は、「どうしても家に帰るなら 用事をすませて 最後に弓矢を構えて 東北の隅から入りなさい」  
「隅に 隠れている者に向かって 出てこい 射殺すぞ」と、「おのれよく聞け、オレが東国から上京してくるのを待ち受けて、今日オレを殺そうとしていることは、先刻承知だ。とっとと出てこい。出てこないと直ちに射殺してしまうぞ」こういえば、わしの陰陽の術により、たとえ姿が見えずとも、おのずからことが発覚しましょう、と教えた。

◎なんと、薦の中から法師がひとり出てきた。世継は従者にその法師を捕縛させた。

問い詰めたがしばらくは言を左右して白状しない。そこで拷問にかけると、ついに白状した。

「私の主人にあたる僧が 奥様とねんごろになり 今日帰ってくるあなた様を 殺害せよと言われた」

世継は、是雄の方に向かって頭を下げ、法師を検非違使に差し出し、妻を離縁した。

◎今昔氏：長年連れ添った妻だといっても、心は許してはいけない。女はこういう心をもつ者もいるのだ。  
また、是雄の占いは不思議である。昔はこういう霊験あらたかな陰陽師がおった。

安倍清明從忠行習道語第十六くあべのせいめい ただゆきに したがひて みちをならふ こと>

◎弓削是雄からしばらく遅れ、有名な安倍清明現れる。安倍清明は賀茂忠行・弓削是雄に習ったらしい。

◎陰陽道：かつて日本は大陸から仏教と道教が入ってきた。仏教と道教はまったく違うが混ざり合い日本人に受け入れられていった。朝廷は遣唐使を派遣してこの二つの思想を学ばせ、仏教と道教を取り入れていった。仏教はその後大々的に日本に浸透していった。一方道教は寺院や仏像といった形がない故、思想として官に入っていたが・。陰陽道が道教であった、とは驚き。陰陽道は天文・暦・吉凶を占うということが主なことであった。平安後期になると民間陰陽師が現れ、それら、聖や修験者は、病・物の怪・方角などに携わった。近代でも山伏や修験者が、狐憑きなどに祈祷を行っていた。

インドで生まれた仏教。中国で生まれた儒教と道教。日本で生まれた神道。仏教は中国で中国的になり日本で日本的になった。儒教と道教も日本で日本的になった。神道はそれぞれ外来思想を取り入れ今の神道になった。この今昔物語のなかにも大聖の話し、天皇に呼ばれ宮中に上がる聖の話が出てくる。オレは聖とは仏教の大僧正だと思っていたが、仏教寺院の中に、陰陽道の中身、神道の中身、儒教の中身が混在していたのかな。山の中の修験者といえども、仏教寺院の中に棲んでいると思っていた。

◎今は昔、天文博士安倍清明という陰陽師がおった。昔の大家にも恥じぬほどの優れた陰陽師であった。幼い時から賀茂忠行という陰陽師について昼夜分かたずこの道を修業したので、いささかも心もとない点はなかった。ところで、その清明がまだ若いときのこと、ある夜、師の忠行が下京方面に出かけたが、その供をして車のあとから歩いているうち、忠行は車の中ですっかり寝入ってしまった。清明がふと見ると、なんといえず恐ろしい鬼どもが車の前方からこっちにやってくる。清明は驚いて車の後ろに走り寄り、忠行を起こしてその旨を告げると、忠行はパッと目を覚まし、鬼の来るのを見るや、法術を使ってたちまち自分も供の者も安全のように姿を隠してしまい、その場を無事通り抜けた。

◎立派になった清明のところに、ひとりの老僧が訪れた。お供に十あまりの小僧を二人連れていた。清明が、「あなたはどなたですか」「播磨の国のモノです あなたはすぐれたお方なので 陰陽道を習いたく思っています」清明は僧を見て、「陰陽道の相当の腕を持つ奴だ オレを試そうと来たに違いない」「この法師をなぶってやろう」そう思い、「お供のふたりの小僧を 隠してしまえ」と心中で念じて印を結び、呪文を唱えた。そうしておいて僧には、「今日は忙しいので 後日きてくれ」という。

僧は帰っていったが、二、三町行くと、舞い戻ってきた。「供がいなくなりました 返していただきたい」

清明は、「おかしいことを言う なんで 御坊のお供を 取ったりするのです」

僧は、「どうぞお許してください」

清明は、「よしよし 御坊が わしを試そうとして来たので・。」といって、何かを唱えると、外の方から供の小僧が走ってきた。

僧は、「あなたはすごい これからは是非弟子にしていきたい」といった。

◎またある日、若公達や僧がいて、「あなたは 人を たちどころに 殺せますか」と失礼な話をしてくる。

清明は、「簡単には殺せません だが少し力を入れさえすれば 簡単に殺せます が 罪なことはしません」

ひとりの公達が池のカエルを見て、「一匹殺して見せてください」

清明は、呪文を唱えつつ草の葉をカエルの方に投げやると、カエルはひしゃげて死んだ。それを見て皆は真っ青になって、震えおののいた。

◎この清明が、家に人のいない時は、ひとりでに葺戸の上げ下ろしをした。また、閉ざす人もいないのに、門が閉ざされていたりした。かように不思議なことが多くあったと、語り伝えている。

◎三津河落山：さんづこうちざん：漢字で表記されると読めない。名前の由来は、ここが三か所への分水嶺だという。大阪湾・伊勢湾・太平洋の三か所に水が流れていくというのが、そらあ理屈でいえばそうかもしれないがちと無理があるのではと思いながら、これを書いている。

かつて同じように漢字で連絡が来て、この字はなんと読むのだろう、なんという名の山だろう、という山があった。「次はこの山に登るよ」と連絡が来て、「え なんと読むのだ」と焦った漢字があった。

燧ヶ岳：ひうちがだけ、檜塚奥峰：ひのきづかおくみね

◎何日か前から予定していたが、梅雨の季節、晴れたらいいが、傘マークになってきた、なんてヒヤヒヤしながら、案の定一日前倒しになった。茨木を8時に出たが歩き始めたのは11時になっていた。距離はたった130キロぐらいしかないが、樫原神宮あたりから地道に入りなかなか進まず時間がかかってしまった。

天気は午前中、お陽さまマークだったが、午後から下り坂、曇りマークになっていた。「大台河原は日本一降水量の多い区域」と聞いていたので、予報士が言う曇りは、山では雨かなと恐れつつ歩いたが、行程の半分は陽が照っていた、帰りの半分も降られることなくお天気には恵まれた一日だった。

◎日本一の降水量というので調べてみた。大台ヶ原は屋久島と並んで日本一の降水量、年間5000ミリだそうだ。標高ゼロメートル太平洋の海まで20キロ、そこから台風シーズンの湿った雲が一挙に1500メートル駆け登って登ってきて大雨を降らすようである。

◎今回は、いつもの大台ヶ原から少し離れた三津河落山に連れられて行った。膝あたりまでの笹のポコリン風景、そこに白骨化した巨木の幹や根があちこちにぽつりぽつりとある、この景色は素晴らしい。山に入って目の高さに遮るのがない、樹が茂っていない、背の高い草がない、まわりの景色が見渡せる、こんな素晴らしいことはない。この山はまだ膝ぐらいまでの笹に地表が覆われている、遠くから見ると草原だ、大地のポコリンを丸く草が覆っている。そんな大地の所々に真っ白い立ち枯れの樹の幹が半分残っている、ひっくり返った根っこまでもが白くなって残っている、またまた白っぽい大きな岩ごろりある。向こうを見やると紀伊半島の山々が連なっている。

◎大台ヶ原の昔は樹木に覆われていた、よその山と同じように樹々が茂っていたそうだ。1959年に来た伊勢湾台風の嵐でそれらのでっかい樹がなぎ倒されたらしい。樹が倒れても山の緑は簡単に再生するものだと思っていた。大台ヶ原のポコリン山々も、再生の初めとして笹が覆い出したが、シカがやって来てその笹を食ったそうだ。シカがどんどん増え、その笹を根元まで喰ったそうだ。根元まで喰うと笹自体が枯れ土砂崩れ、崖崩れが起こるらしい。そういえば弁当を食ったてっぺんあたりには鹿の糞が散乱していたね。

◎今回の大台ヶ原は、白山に行こうという話に変更になり、ここになった。石徹白から白山へという話だった。石徹白に最初に行ったのはまだ50歳ぐらいだったか、昔の山仲間と野伏ヶ岳に登って石徹白の民宿に泊まった。そのあとまた別の日に大野の方から入って赤兎山の避難小屋にも泊まった。30年近くも経ってしまうと記憶もあやふやである。当時はパソコンをすでに持っていたが、山のことを記録することもなく、写真も少ない。

◎御岳山が噴火したのが2014年だそうで、そのあとに衣川さんと石徹白に入った。ほぼ10年前だ。細い川沿い道を上流まで行き車を止めて避難小屋まで歩き泊まった。翌日、三の峰までか別山までか忘れたが、避難小屋に二泊して帰ったような記憶である。

- ◎先日来、まわりで大嶺山系の話がいろいろ出だした。「大峰はもう過去のモノ オレにはちと ハードルが高すぎる」と老齢であることを理由に、ジジイは無理かなと思っていた。勿論、10 年前のように 7 日間もかけての縦走はないけれど、「懐かしい山を ひとつひとつでも 登ることができたら 素晴らしい」と思っている。
- ◎「オレの相棒が その時は 白装束でした」「え わたしは 今 四国遍路 歩いています 上衣だけ 白装束なので 全身白装束なんて カッコイイ」とメールが来た。10 年前の写真を探してみると、衣川さんの写真が出てきた。足元は白い地下足袋、これは決まっているね、登山靴じゃさまにならないね。ズボンは作業ズボンの白で本格和装ではないが、これでいいじゃないか。上はきちんと着物のように前を締めている。腕に首に数珠をかけ、手には簡単な錫杖、尻には鹿皮の敷物をぶら下げ、ほんとうは白い菅笠もあったが、陰しい尾根道で風に煽られ飛んでしまった。「〇〇〇〇 ソワカ・・・」と永らく経を唱えていた姿が懐かしい。
- ◎1 年前に釈迦ヶ岳に 2 度行った。一回目は懐かしの前鬼からから入った。元気なころは乗越までひとっ飛びと思っていたが、尾根道の大嶺奥駆道に登ったところにはふうふうだった。二回目は谷瀬のつり橋あたりから山道をグングン車で登り 2 時間足らずで釈迦ヶ岳に着いた。

◎10 年前の思い出に戻ろう。下記は衣川さんのメモ。

- 4 月 29 日雨：近鉄吉野駅午前 8 時半出立、二蔵宿小屋午後 4 時着（泊）8 時間行動。  
4 月 30 日雨：二蔵宿小屋午前 4 時半出立、行者還小屋午後 7 時着（泊）14 時間行動。  
5 月 1 日晴れ：行者還小屋午前 6 時半出立、楊子ノ宿午後 4 時半着（泊）10 時間行動。  
5 月 2 日晴れ：楊子ノ宿午前 4 時半出立、持経ノ宿午後 4 時半着（泊）12 時間行動。  
5 月 3 日晴れ：持経ノ宿午前 6 時出立、行仙宿小屋午後 12 時半着（泊）6 時間行動。  
5 月 4 日晴れ：行仙宿小屋午前 4 時出立、玉置神社午後 3 時半着（泊）11 時間行動。  
5 月 5 日雨：玉置神社午前 4 時半出立、熊野本宮大社午後 1 時半着、9 時間行動、帰阪。

◎六日目に泊まった行仙小屋をネットで調べ思い出した。もう 6 日目ともなると相当疲れだしていた。大嶺奥駆道、大阪に近い山、吉野に近い山は単体でいくつか登っていたので、「おお ここか」というように知った山があったが、熊野に近づくにつれ初めての山になってきた。かつて前鬼からと、持教の宿あたりがからとが、一番奥でそれより熊野よりは知らない。山の標高もだんだん低くなり、1800 あった高さが、1200 ぐらいになってきた。行仙小屋に着いた時はまだ明るかった。幾人かの人が小屋のまわりの整備をしていた。その日は地元の方々が小屋まわりの整備に上がっておられたとか、「もう少しで 飯時分なので 天ぷらをします みなさんも召し上がってください」と言われおおいに喜んだ。「それじゃ 水を汲んできましょう」とポリタンクをもって下の方に下った。下りは 10 分ぐらいで階段やはしごやらを、登りは水をもってエンヤコラだ。石の間にきれいな水がたゆたゆ流れている、この水は素晴らしい。缶ビールまでいただき天ぷらを堪能した。

◎最終日は玉置神社で泊まった、相棒がおごってくれた。玉置神社に着いた時もまだ明るかった。すでに予約をしてあったので神社で受付をすませ、神社のまわりをぐるり散歩した。「お 一升瓶だ！」これを見たときには感激したね、「ちょっと いただきょう」横に白い皿が置いてある。この白い皿は、絵を描くものなら 1 枚 2 枚持っている絵具を溶く皿と同じ形状、そのさらに酒を注ぎまづは一献、「オレも・・・」2 回 3 回と酒を注いだ。腹に染み渡るうまさであった。何日かぶりの風呂に入り、まともな食事、まともな布団であった。

◎翌日は最終日。標高がどんどん下がり、霧の中でシャクナゲが咲いていたような記憶がある。熊野川をずぼずぼ入って向こうに渡るのは正式スタイルらしいが、その日は水が増していて、橋を渡った。大阪に帰り着き新大阪駅で、相棒の行きつけの店でたらふく飲んで帰った。

- ◎白木峰に行こうということで、夜の 8 時に岡村車で大日駅タクシー乗り場にいる。夜の 8 時に出て深夜 2 時に到着、3 時間ほど仮眠をしてぐるり一回りしようという計画である。オレには初めての道で、初めての山なので、道路情報や山情報をネットで何度か調べてみた。
- ◎地図を見るに何度も行ったことがある新穂高温泉に近い、新穂高温泉と小松海岸の中間あたりである。道がまったくわからない。Google では東海北陸道の飛鳥清見 IC から国道 471 号線を行くようになっているが、だいぶ複雑な進み具合である。車を走らせて飛鳥清見あたりまではすんなり走り、高山から 471 号線、そして 360 との交差あたりで 1 時間ほどのロスをしてしまった。ここからが面白い、なんとか 471 号線の細いルートに乗った、国道なのにまるで田舎の村の道、家と田んぼの間の坂を上っていくような道、舗装も完璧でないようながたがた道を樽峠に向かい深夜に越える大冒険をした。
- ◎トイレがあるキャンプ場あたりに 3 時頃着き、庇の下にマットを敷きビールを飲んで仮眠した。1 時間ほどして湯を沸かしヌードルやらおにぎりを食った。徹夜山行、去年のオーレン小屋から天狗岳もそうだったが、この山行スタイルは 50 歳までだね、ジジイには酷である。
- ◎国道 471 号線：酷道ということで有名である。夜中なので対向車は 1 台だけだったのはよかった。真っ暗でライトをアップにして身体を前のめりにハンドルを握った。枝が道にはみ出ている、下の方で水の流れる音、鬱蒼とした樹々、切り立っている崖かなと思われるがガードレールもない緊張の 1 時間であった。帰りはナビ君砺波 IC を指してくれた。山の中を 2 時間近く走らされたが、帰って地図を見ると 471 号線を北上して富山 IC まで行く方が帰りが早いかも知れない。運転者が二人、谷元さんがいてくれて助かった。
- ◎キャンプ場に着いた時点で、まだ暗いのに 10 台ぐらいの車があり、若者たちが登山の用意をしていた。人気の山、梅雨の直前だがまだ晴れている、「今を逃せない」とこの 2.3 日だ。この山行を聞いた時、「雨で中止かも」と言われていたが、梅雨がちょっとずつ後ろにずれていった感があり、「これなら行けそう ゴウだ」天気は晴れマークが表れ出した、「やれうれしや」
- ◎6:15 登り始めた。まずは急な登をエンヤコラ、「お ギンリュウソウ」草の間に白い花、違うのではと怪しみまわりの草をそっと除けるとギンリュウソウが二輪、「おお 幸せが来る」今度はオレがそっとひとりごと。
- ◎白木峰のてっぺんにやって来た。この山は草原の山、草原と言っても草ではなく小さい木、サツキやなにやらの膝ぐらいの高さの樹がびっしり生えているさまはまるで草原、人の通る登山道だけが草を分け土が見える。木道も敷いてある、ここの木道は地面の上に枕木大の材木を三列にならべ外れないよう滑らないように横桟が釘で打ちつけてある。木道の濡れたところを踏んで、おっととが一度あった。先日行った大台ヶ原の風景も草原だったが、ここの草原ポコリンは大台ヶ原の何倍もの規模、“大ぶろしき”という表現をいのように使わせてもらおうと、まさに大風呂敷の大草原、いいねえ。枕木は鉄道用の硬い栗ではなくスギかヒノキのような材木だ。
- ◎てっぺんに丸い机台がありまわりの山々の名が記してある。白山、白馬、剣・・「え 富士山と 書いてあるよ見える？ あれかな・・」「違うよ 見えないよ」360 度まる見えである。
- ◎「これが コバイケソウ」「ニッコウキスゲも 咲いてる」「いいところだあ・・」
- ◎「酷道という名の 国道 471 号線 一瞬のハンドル切り違えで 谷底 ほんと 楽しかった 笑っちゃうね そんなこんなのおかげ 今は 最高の景色 すんばらしいねえ・・」
- ◎いくつかの池がある、池塘：高山の湿原や泥炭地にある池沼。「お かわいらしい 白い綿 タンポポじゃなく ワタスゲ・・」この白い花が池の水に光って吹かれてタユタユしている、気に入った。
- ◎岐阜県と富山県の県境の山、標高 1500M ぐらいの山だけれど、その表情は素晴らしい。木道を歩き、池塘をめぐる、いくつかの花を見た。避難小屋もあったのでそこでしばらく休んだ。「先にスモモ それから 大福もち 反対だと スモモがおいしくないよ」ともおいしくいただいた。「わたしは アワ」ビールが出てきた。避難小屋は立派で炉まである、2 階もありごろ寝なら 20 人ぐらいは寝られそう。泊まる人がいないのか床は埃だらけである。24 時間の弾丸山行でした。最後に一言、「覚醒の薬 効いた 眠くなかった 運転できた」

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎先日、知人からのメールで、「高千穂の峰に 登った」と聞き、「お 天孫降臨だ」と思った。別名を“霧島山”というらしい。ネットにいくつかの写真が載っているが、1500M 少しの山、火口があり、草木が少なく、姿はなかなか魅力的な山だ。「うちが 天孫降臨の 場所だ」というのが二か所あり、高千穂の峰は鹿児島県と宮崎県の境にある。三浦先生：「かつての 島津藩が うっとこの 高千穂の峰が 天孫降臨の地だと ごり押ししたらしい」もう一箇所は宮崎県の北部の“高千穂峡”だそうだ。

◎さて、タケミカツチの返り言を聞いたアマテラスとタカギの神とのおふたりは、あらためて日嗣の御子マサカツアツカチハヤヒアメノオシホミミに向こうて、

「今、 ようやく蘆原の中つ国を和らげ終えたとの知らせがあった。そこで、先に言葉を寄せてゆだねたとおりに、中つ国に降りいまして、統（す）べ治めなされ」と言葉を寄せられた。

するとその日継ぎの御子オシホミミは、

「私が降りようとして装いを整えている間に、子が産まれてしまいました。名は、アメニキシクニニシアマツヒコヒコホノニニギと申します。この子を降ろすのがよろしいかと思ひます」と答えた。

そこで、申し出のままに、アマテラスはヒコホノニニギに言葉をかけて、

「この豊葦原の瑞穂の国は、なんじが統べ治める国であると、父オシホミミの言葉と共に委ねられた。さあ、あらためて、わが言の葉のままに降り行きなさい」と仰せになった。

◎ニニギ：邇邇芸命（ににぎのみこと：にぎにぎしい：にぎやか）志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命  
アマテラスの孫。男神。

アメニキシ（天を和らげ）クニニキシ（国を和らげ）アマツヒコ（天空の日の御子）ヒコホノニニギ

◎当初はアマテラスの息子、オシホミミが降臨することになっていたが、葦原中つ国が平定される間にアマテラスの孫が生まれ、そのニニギを降ろして葦原中つ国を統治させることになった。

◎国土を生んだのはイザナミ・イザナミだった。国土を整備して作り上げたのは、オオクニヌシだった。

なぜ、降臨が、子から孫に交替したのか。なぜ、国譲りは出雲なのに、降臨の地は九州なのか、諸説あり。

◎そうして、ヒコホノニニギは、天降（あも）りしようとした、そのとき、下を眺めると、その道中の天の八つ辻に、上は高天の原を照らし輝かし、下は葦原の中つ国を光り輝かし、見知らぬ神が待ち受けておった。それで、アマテラスとタカギの神とのお言葉で、アメノウズメに仰せになることは、

「汝は、か弱い女の神ではあるが、向かい合うと面で勝つ神である。ゆえにひとまず、なんじ先立ち行きて尋ねることには、我が御子の天降りしようとする道を、誰が遮るごとく居るのか、と問うてまいれ」

◎アマテラスとタカギが、アマテラスの孫、ニニギを降臨させようとする。二代目のオシホミミもニニギも、だらしなお坊ちゃん、うしろ盾の神々がうしろにいないと何もできない。

◎アメノウズメ：アマテラスが天の岩戸に隠れてしまった時、活躍した女神。＜足踏みして音を響かせながら神懸かりして、ふたつの乳房を搔き出し、解いた裳の緒を、秀処（ほと）のあたりまで押したらしい。このように裸体をさらして、妖艶な踊りで神々を魅了した、そんな色っぽい反面、＜向かい合うと面で勝つ神である＞にらめっこして絶対負けない神、得体のしれないサルタビコの妖気をはね返してしまう、そんな力を顔面に持つ女神でもあった。

◎胆力、アメノウズメは、妖艶の半面胆力の神でもあった。

◎「ああ うらやましい 胆力の無いオレ 気の弱いオレ なり」

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎ここによく、ヒコホノニギが降りることになった。

その前に、アメノウズメが、見知らぬ奴：その神に向かって問うと、「わたしめは、国つ神サルタビコと申します。天つ神の御子が、天降りなされると聞き、先払いとして お仕え申しあげたい、と待っていました」

◎先生：日本書記では、サルタビコは、口や尻が赤く鼻が長い、天狗の前身の様な神。最初の出会いで対立関係が生じるかと思われたが、アメノウズメの迫力で、拍子抜けするほど従順な態度であった。

◎さてここに、仰せを受けたアマツヒコヒコホノニギは、高天が原の御座所（みましどころ）から立ち上がると、天にかかる八重のたなびき雲を押し分けて、力強く道を踏み分け踏み分けして、天の浮橋に到りつき、しっかりとお立ちになると、そこから一息に、筑紫の日向（ひむか）の高千穂に高々と聳える嶺に天降（あもり）された。

◎するとそこへ、アメノオシヒとアマツクメの二人が出迎え、大きく堅い矢筒を背負い、握りに大きな瘤の付いた太刀を取り佩き、弦く強く張った弾き弓を手に持ち、牡鹿の角で作った、鋭く磨いた鏃（やじり）を付けた矢を脇に挟んで、先払いとしてお仕え申しあげた。

★アメノオシヒ：大伴氏の祖先神。★アマツクメ：久米氏の祖先神。戦闘集団として天皇家に仕えた。

◎ここからは、韓の国（からの国：朝鮮半島：）に向き合い、笠沙の岬にもつながり通っており、朝日が海からまっすぐに昇る国、夕日がいつまでも輝き渡る国である。この地には、ほかに比べることのできない素晴らしいところである、といい、土の底を磐根に届くまで深々と宮の柱を掘りたて、高天が原にも届くほど高々と氷木を聳やかした宮を造って、そこに住んだ。

◎お供は、

★アメノコヤネ：天の岩戸で祝詞を奏上した。中臣の連の祖神。藤原家。

★フトダマ：天の岩戸で鏡を掲げた祭祀の神。忌部（いんべ）の連の祖神。のちに失脚。

★アメノウズメ：踊りの神。祭祀に関わる巫女の一族。

★イシコリドメ：天の岩戸で八咫鏡を作成した神。鏡作りの連の祖神。

★タマノオヤ：天の岩戸で八尺の勾玉を作成した神。玉祖の連の祖神。

この五柱はアマテラスを天の岩家から引き出した神。それと。

★オモヒカネ：天の岩戸で軍議を助言、思慮の神。

★アメノタチカラヲ：天の岩戸で岩戸を蹴散らした腕力の神。

★アメノイハトワケ：岩戸の管理をしていた門番の神。

それと

★八尺（やさか）の勾玉。

★八咫鏡（やたかがみ）。鏡を自分だと思い祀れと命じた。

★草薙の剣。

◎アメノウズメは道案内をしたサルタヒコを無事送り届けます。伊勢湾で海に棲むすべての生き物に、「神の御子に仕えるか」と尋ね、みな「お仕えます」と答えたが、ナマコは返事がない。「何も答えることができない口は こうしてくれる」と刀で口を切って裂いた。ナマコの口は横に咲けている。

◎サルタビコは、先払いにお仕え申す前のこと、伊勢の国で漁をしており、貝に手を挟まれ溺れてしまい、海の底で沈んでいたことがある。先生：間抜けなお方、赤い口や尻、高い鼻、この一族は化粧をするか、仮面をつけていたのでは・・。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎さて、アマツヒコヒコホノニニギは、麗しい乙女ごに出会った。名はコノハナノサクヤビメ（カムアタツヒメ）。その父オホヤマツミに妻乞いの使いを遣わしたところ、父はとても喜び、姉のイハナガヒメも副え、山ほども盛り上げた、契りの品を持たせニニギのもとへ嫁がせた。

ニニギは、姉のイハナガヒメをひと目見て、醜いと送り返してしまった。

父は怒りを込めて、「娘二人を送ったのは、イハナガヒメは常永久に変わりがないが コノハナノサクヤビメは花が咲くように栄えるが 一方だけなら花は枯れるように散り落ちますぞ」

◎コノハナサクヤビメがニニギの前に出て、「身ごもりました」

ニニギは、「一夜の契りで孕んだのか。わが子ではないはず。そこらの国つ神の子だろう」

サクヤビメは、「わが腹の子が、天つ神の御子の子ならば 無事生まれます」といい、大きな殿を作り、土でもってまわりをすっかり塗り塞ぎ、火を着け、燃え盛る火の中で三柱の子を産んだ。

ホデリ：海幸彦。つぎに、ホスセリ。次に、ホヨリ：山幸彦。三人のうち弟が残っていく。

◎兄のホデリは：ウミサチビコ：鰭の広く大きい魚や、鰭の狭く小さい魚を獲り、弟のホヨリは：ヤマサチビコ：毛の荒い大きなけものや、毛の柔らかな小さいけものを獲って暮らしておった。

◎兄の海幸彦と弟の山幸彦の話は子ども時代から読み聞かされて親しんできた。弟が兄に、「道具を交換しよう」と持ち掛けたが、弟は兄の道具である“針”を失くしてしまう。「あの針を返せ あの針でないとだめ」意地悪の兄は許してくれないと聞かされてきたが、人の大事な道具を粗末に扱い失くしてしまった方が悪いのでは・・・という解釈は無かったのかな。

◎古事記とは関係がないが、“浦島太郎”というおとぎ話がある。

若い漁師の浦島太郎は、年老いた母と暮らしていた。ある日浜辺で、子ども達が亀を虐めているのを見て、お金を渡し亀を助けてやった。数日後大きな亀が現れ、太郎に恩返しをしたいという。太郎は亀の背に乗り竜宮城へ連れていかれる。竜宮城では美しい乙姫が迎えご馳走や歌舞音曲で歓待してくれた。ある日ふと年老いた母のことを思い出し、地上に帰る決心をする。乙姫様から、「この箱があればまた元の竜宮城に帰ってこられるが、勝手に、絶対に開けてはいけません」という玉手箱を手渡される。亀に乗って元の村に帰ると、村は何百年も経って母の姿もない。太郎は悲しくなって玉手箱の蓋を開けると、白い煙が立ち込め太郎は皺だらけの老人になってしまった。

◎浦島太郎のおとぎ話は万葉集にも似た話があるらしい。浦島太郎の物語は古事記が元ネタの様である。

◎日本書記に“浦嶋子伝説”がある。浦嶋子という若者が大亀を釣り上げると、たちまち美しい女性となり、妻にして二人で海に入ると、蓬莱山（仙人が住む山）に着いた。

◎御伽草子に収録されている浦島太郎は室町時代に作られた。昭和初期の教科書に載せられた。原作では老人になった浦島太郎が鶴になって蓬莱山に飛んでいき、時を同じくして竜宮城の乙姫様も亀に姿を変え蓬莱山に向かい、ふたりはそこで結ばれた、という結末だそうだ。

◎丹後の国風土記：水江浦嶋子はとても美男子だった。小舟に乗って釣りに出掛けたが三日三晩、一匹も釣れなかった。しかし五色の亀を得た。その亀がいつしか美しい女性となった。そして、「私は天上の仙人の家の者：天女である」と名乗った。浦嶋子は歓待され3年間海中の仙人の都に留まった。浦嶋子は故郷のことを思い出し、神仙の堺から俗世に戻ってくる。この3年は俗世では300年であった。「開けるな」と言われていた玉手箱を開けてしまう。「開けてしまうと二度と会えませんよ」と言われた通り、乙姫とは永遠の別れとなってしまった。



三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎古事記の中の海幸彦と山幸彦。

◎アマツヒコヒコホノニギとコノハナノサクヤビメは一夜に契りで孕んだ。

男は、「たった一夜で・・・？われの子ではないのでは・・・」と疑った。

女は、「ならば 火の中で 生んでみせる 無事なら お前さんの子だ」

◎ホデリ・たちまち消えた子・ホヲリの3人の御子たち。兄がウミサチビコ・弟がヤマサチビコ。

◎日々それぞれ、獲物を獲って暮らしていたが、弟が兄に、道具を替えてみようと提案するも、兄は拒否する。

弟が再三頼むので、兄は渋々道具を交換した。

◎弟はいつまで経っても魚がかからず、おまけに道具の針まで失くしてしまった。兄が針を返せという。弟は失くしてしまったという。兄は返せ返せと迫る。弟は困り、剣を鑄つぶして500もの針を償おうとしたが、兄は受け取らない。次に1000もの針を償おうとしたが、兄は受け取らない、失くした針がいいという。

◎困ってしまった弟は、海辺で泣き悲しんでいると、シホツク：潮の霊の神が現れ、良き謀を授けた。竹の籠を作り、ホヲリをその中に乗せ、ワタツミの宮まで行け、という。

◎ワタツミの宮の、大きなカツラの木の上で待っていると、はした女が現れトヨタマビメに引き合わせた。

◎トヨタマビメは、ホヲリをひと目見るなりとって返し、父のワタツミに、「麗しい方がおられる」娘の高ぶりを見抜いた父のワタツミは、「この方は、アマツヒコの御子、ソラツヒコであるぞ」と歓待しトヨタマビメを妻として差し出した。ニニギも、コノハナノサクヤビメの父に、妻乞いをしている。

◎ホヲリはトヨタマビメと共に三年もの間その国に住み着いた。ホヲリのため息に、「三年もいらっしゃるのに、今宵に限って何を嘆かれる・・・」その父が尋ねた。ホヲリはワタツミに釣り針のことを話すと、海の中の魚どもを呼び集め、針が刺さった鯛が見つかり、その針をホヲリに返した。

◎ワタツミは、ホヲリに、針を兄に返すときの呪文を授けた。「このちは おぼち すすち まぢち うるち」  
「兄が上に田を作ったら あなたは下に われは 水を司っている 兄を悩まし苦しめなさい」

◎ホヲリは、ワニに乗って地上に帰った。ワタツミに教えられた通りに、兄ホデリに針を返した。兄ホデリは呪詛された針では海の幸から見放され、荒々しく弟を攻めたが、反対に弟に苦しめられ、謝った。

◎生まれた時は兄弟であったが、ホデリは隼人の祖先神であった。のちに天皇家に服属した一族。

◎ある時、ワタツミの娘、トヨタマビメがやって来た。「身ごもって 生まれます 天つ神の御子は 海原では生めないの 上の国に来ました」すぐさま海辺に産屋を作った。

◎「どうぞ私を見ないでください」見るなというて見ってしまう神話の常套、ホヲリが覗くと、トヨタマビメの姿は、八尋ほどのワニがのたうち回っていた。

◎トヨタマビメは、おのれの姿を見られたことに恥じ入り、産屋に御子を残して、ワタツミの宮に帰ってしまった。御子の名は、アマツヒコヒココナギサタケウガヤフキアヘズ。

◎トヨタマビメは、産屋を覗いたことを恨んでいたが、生んだ子を恋しく思う心は抑えられず、妹の、タマヨリビメを遣わし、歌をうたい、その返歌。生まれた御子：ヒコホホデミは、高千穂の宮で580歳まで生きた。

|              |                   |
|--------------|-------------------|
| 赤だまは をさへ光れど  | 赤く輝く石の玉 をさへ光れど    |
| しらたまの 君がよそひし | 真白な珠にも似た あなた様の姿こそ |
| たふとくありけり     | さらに清らかに貴くいます      |

|               |                       |
|---------------|-----------------------|
| おきつとり かもどく島に  | 沖から飛び来る カモの宿る島で       |
| わがいねし いもはわすれじ | 我が誘いてともに寝た いとしい妹は忘れない |
| 世のことごとに       | 世のことごとに               |

- ◎梅雨の晴れ間、明日だ、ということで山に行くことが決まった。天気予報も傘マークから晴れマークに変わってきた。朝の 6 時 31 分茨木発の阪急電車に、電車は走り出したが山崎あたりから大雨が降ってきた。一番前の車両に乗っていると、運転席のワイパーが回転している。予報通りなら登山口に着くころに快晴のはずだがこの時期予報もコロコロ変わる。降りませんように、曇りでもいいからとは晴れますようにと祈るばかりだ
- ◎バスで行くよと知らせが入り調べると、昔は京阪三条から出ていたバスが今は出町柳駅から出発する。1 時間ほど乗り、坊村を過ぎ朽木栃生で下車した。運賃は 1400 円である。栃生から、釣瓶岳、細川越、武奈ヶ岳、北比良峠、イン谷口、比良駅のコースである。
- ◎前に、来た時は同じコースを上に入り上がり、蛇谷ヶ峰に行ったコースと、釣瓶岳から葛川の方に降ったコースがあった。その 2 回とも、朽木栃生バス停前に車を置きぐるり一周した。
- ◎朽木栃生：とちゅう 伊香立：いかだて：の途中と区別するために、朽木栃生というそうだと。漢字が違えど、同じ音の地名が近所にあるのはめずらしい。
- ◎9：00 歩き始める。バスは満員状態で 2 台来て全員座れた。坊村で殆んどが降りオレは前の車両に乗り移り、真鍋・山岡の両さんと合流した。バス停を降りると、「おお 来たことがある場所」と記憶が蘇り、すたすた登山口に歩き出した。バス停から 30M ほどバックしたところに登山届の箱が据え付けられていた。
- ◎30 分ほど登った。予報ではお陽さまマークだったが空はグレーで地面はビショリ濡れている。「ヒルに気を付けよう」と言葉が聞こえずボンを見ると 2 センチほどの奴が 5 匹ほどズボンを這いあがってきている。慌て新品の帽子で払ったが、指にも絡みついている。2 時間ほど上のあたりにもヒルがいたが払いのけた。それでも密かにどこかに潜り込んでいないかと戦々恐々だったが、帰って風呂に入り無事を確認。
- ◎コメカイ道というらしい。山の人々が琵琶湖のそばで採れる米を買いに行った山道なのかな。エンヤコラ、今にも降りそうな空、ヒルを払いつつ、どっこいしょ。凍らせたゼリーを立ったままで喰った。自然林の中は広葉樹と針葉樹がみどりを広げている。太い幹が剥がされた樹が数本、熊君いるんだね。
- ◎尾根道に出た。イクワタ峠の標識、左に行くと蛇谷ヶ峰、反射板が見えないが、こんもり霞んで見えるのが蛇谷だろう。右に行くと釣瓶岳、ここから尾根道だ。登山口から尾根道まで 2 時間ちょっと、尾根道を武奈ヶ岳までが、2 時間ちょっとのコースだ。
- ◎尾根道歩きは景色がいい、登っては下り、下ってはまた登り、うしろを振り返ればポコリンポコリン草原の様な山肌、前には大きな岩がある、向こうに見えるのが目的の武奈ヶ岳。
- ◎1：00 武奈ヶ岳にやって来た。山頂は朝 2 台のバスに乗っていた方がたでいっぱい、我々は手前で休憩した。飯は尾根道で喰った。オレは玄米飯に梅干し、玉ねぎベーコンを炒めおかずにして持ってきた。寒い冬は、コンビニおにぎりとかップヌードル弁当も美味い。
- ◎お気に入りのコヤマノ岳も葉が生い茂りブナの美しさが見られない。2 時頃に湿原に下りてきた。地面にまっ黒のイモリ君がひょこひょこ。つまみあげ腹を見ると鮮やかなエンジ色、この色調はすごい、池の中でこの色が舞う姿はいいんじゃないのかね。インタニロからバスだと思っていたが、「今日はバスが運行していない」ということを聞いた。朝、出町柳から来たバスも運行は休みの日だけ、比良とイン谷口をむすぶバスも休みの日だけだけれど・・・と思っていたら、バス道が土砂崩れで崩落したようだ。
- ◎ネットの記事：土砂崩れの崩落現場、重機が入り明日には通れそうな勢い。もうひとつ、金糞峠も崩壊進行中らしい。通り過ぎて数分、大きな岩が落ちる音が聞こえた、と書いている。オレ達、通らなくてよかったね。
- ◎イン谷口まで来たが、車が一台も止まっていない。今日、ここを計画してきた人も多かっただろうね。大雨の時期山間の道は土砂崩れがこわい。まもなく駅、電車がもうすぐ着く、少し待っただけでうまく乗れた。ビールを持っている、ということで一本いただいた。疲れた身体にしみわたり、その美味さをかみしめた。
- ◎8 時間 40 分、14 キロの山行でした。スマホ君は、たった 14 キロを時間かけて、もっと早く歩けと落第点。7 時半ごろに帰り着き、風呂、飯でした。